

ぼくには帰る故郷がない

川口幸宏

姉の7回忌で久しぶりに近鉄線に乗った。前に乗った時は一昨年秋。母の死の知らせを聞いた時だ。

名古屋駅から約1時間揺られて、久居駅に電車が停車した。ぼくはこの駅がある町に生まれ18歳まで育った。その後は、いわゆる帰省ということはあるが、住んだことは一度もない。ぼくが東京に出てから、やはり東京で音楽を学んでいた姉が教師として着任し結婚して家を出るまでの時期を除いて、母はずっとこの町で働き、住み、生活を送り続けた。たった一人で、だ。ぼくたち家族の生活の匂いが染みついた町と誇りを持って言うことができればいいが、ぼく自身は40年以上もこの町とは縁遠く、離れて後の町の変遷の過程などは知る由もない。機会があってこの町に「降り立つ」時毎に、道が変わり、建物が変わり、道が出来、街路がなくなり、やがて田畑がなくなり、そして近郊の山や林が削り取られ、池が埋め立てられ、立派な道路が建築されている、ということに気付く。子どもの頃の行きつけの店も次第次第に姿を消していった。今、車窓から眺める町の様子は木造建築、黒瓦屋根の光景はめっきり少なくなった。カラフルなのは結構だがどこか軽々しい。

電車は久居駅を離れ、徐々にスピードを上げていく。スピードが上がりきらない左車窓を、ぼくたち親子3人が50年以上も前に暮らしていた土地が走り抜けるはずである。顔を窓にぴったりくっつけ、どんなささやかなことでも見逃さないぞと神経を集中した。線路沿いの小さな空き地を利用した畑は健在であった。線路から3メートルも離れればせいぜい荷車しか通れない小道が並行して走っているのもそのままであった。そして、かつての我が家のお隣—小学校教師であった母がもっとも忌み嫌った、母子家庭で、母親が「飲み屋」(当時は確かバーと呼んでいたが、都会のそれとは比較にならぬ)女将をしていた—はまだ健在であった!50年以上—いや、もっともっと年月が経っている—の風雪に耐えて、今もなお、誰かの生活の場に利用されているようである。そして、その家から1メートルほどの空間があって、我が家があった。我が家は借家であったが、もともとは農家の離れである。母屋、つまり貸し主とは、ドア一枚で繋がっていた。その母屋の前の庭にはつるべ井戸があり、共同井戸として使用されていた。ぼくもよく水汲みに行き、ご近所のおばさんたちに、からかわれたものだ。「あんたは、ほんと、小人やなあ」とびっきり育ちが遅れていたぼくは、同年代集団の中でも、常に先頭に置かれ続けていたのである。車窓か

らは、「飲み屋」の他はすべて姿が消している光景しか、眺めることが出来なかった。「母屋」も「離れ」も、そして百姓道具が仕舞い込まれ、時々悪さをしては、そこに荒縄で縛られて放り込まれた物置小屋も、美しい家庭園に模様替えしていた。「そうだ、あの柿の木はどうなったのだろう。まだあるかしら」。「母屋の東側の、旧陸軍の練兵場との境になっていたどぶ川は、どうなったのだろう」。さまざまな思い出と懐かしさが瞬時浮かんでくるが、電車のスピードがそれらの光景を遠くしていく。身体を進行方向とは逆の方に向け、懸命に昔の痕跡を探す。柿の木には大きな思い出が二つある。一つは木登りをし、得意絶頂で枝を揺さぶったまではいいものの、枝がぼきりと根本から折れてしまい、真っ逆さまに落ちてしまったこと。幸い下が軟らかい土であったので、軽い脳しんとうですんだ。二つは、何を悪さしたのか思い出せないのだが、荒縄でぐるぐる巻きにされ、宮本武蔵よろしく、ぶら下げられてかなりの時間放って置かれたこと。どぶ川にも思い出が詰まっている。蛇やカエル、ザリガニが賑やかに住んでいたことから絶好の遊び場であったし（ぼくは、少年期、ほとんどが一人遊びであった）、夜になるとヤナを仕掛けて朝方ヤナを引き上げる。中にはドジョウがたくさん入っている。餌は近所の田圃で捕ったタニシの剥き身。ヤナからドジョウを水を張ったブリキの手洗い桶に移し半日置く。泥を吐かせるためである。泥を吐いたドジョウは食卓に登る。たいてい、ぼくが調理をしたので、簡単に卵とじであった。遠ざかる車窓から見えたのは、柿の木は地上1メートルほど残され切り取られていた。どぶ川のあたりには舗装された車道が走っていた。そしてその車道の向こうにはきらびやかな戸建て住宅が所狭しと並んでいた。

ぼくが10歳まで住んでいたところである。旧村の町外れであった。朝鮮戦争の時には、練兵場を離発着する飛行機の轟音が安普請の我が家を土台から揺さぶり、時には障子紙を破ってしまうこともあった。屋根はトタン葺きであったが、明らかに飛行機の飛来の影響でトタンがめくり上がり、雨の時などは修理が追いつかず、破れ傘—唐傘—をさして食事をせざるを得ないこともあった。破れ傘しかなかったので破れ傘をさしたのである。幼年期から少年期前期まで、濃厚な共同体の中で、ぼくは育った。同世代との遊びの思い出はほとんどないが、大人に手を引かれ、大人にからかわれ、大人に教えられ、大人にこっぴどく怒られ、さまざまなことを一緒にし、一緒に過ごした。それ以降の人生では、共同体を実感することはほとんどない。家が増え、人が増え、道路が舗装されて歩きやすくなっていくに連れて、人と人とが具体的な生活を通して繋がっているという実感を持つことが

出来なくなっていった。11歳から過ごした、町中の、武家屋敷の面影が残っている地域で、ぼくは人間関係に閉鎖的であることが自分を守ることだと学習した。母がぼくや2歳上の姉の勉学のために、正直に言えば、立身出世のためにと、大きな借金をしてまで、家を新築した。同じ時期、同じように周りに家を建てていたから、今風に言えば、その地域は新興住宅地なのであろう。正確には、もとマッチ工場があったところで、戦後つぶれ工場跡を住宅地に分譲したのであるが。母の死後は、当然、その家守をぼくがしなければならないのだが、ぼくは、姉の前で財産継承権の放棄を宣言した。11歳から18歳まで過ごし、それ以降は、「ちょっと母のところに行ってきます」と言って数日間立ち寄ることを繰り返してきた家。母の匂いのするうちはそこに哀愁を感じるのであったが、恐らく母の匂いのしないところにはもうぼくには縁がなくなると、何時しか思うようになっていた。その家は、母と子が、子が長ずるに連れて、母の持つ人間の生き方の二面性をめぐって鋭い対立を繰り返す場でありこそすれ、ついぞ、絆を深める協働空間とはなり得なかった。ぼくは、この家に、故郷ということばを冠することが出来ないでいる。

車窓遠く離れてしまったぼくの前風景—それこそぼくの故郷である。が、故郷はもうない。

(2007年作)